

1 学校教育目標	
<p>生徒一人一人の人権を尊重し、主体的に学ぶ意欲と社会性豊かな「生きる力」を育み、多様な社会に貢献・活躍できる知・徳・体の調和のとれた生徒を育成し、保護者・地域からの信頼される教育活動を充実させる。</p> <p style="text-align: center;">「教育指針」 自ら学ぶ 豊かに鍛える 共に歩む</p>	
2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像	
学校像	<p>全ての生徒が自分の長所や可能性を認識し、他者とお互いが価値ある存在として認め合い、社会をたくましく生き抜くために必要な能力や態度を身に付けた生徒を育てる学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自ら学ぶ力を育む学校 生徒の自己肯定感を伸ばし、生徒が自分の可能性を信じて、社会をたくましく生き抜くための力を育む学校 ○ 豊かに鍛える学校 心を豊かに、身体を鍛え、生きる力を身に付ける教育活動が展開される学校 ○ 共に歩む「地域立中学校」 P T A・開かれた学校づくり協議会・関係諸機関と協力し、一体となって生徒の健全育成を図るために、地域の教育力、教育資源を活用し、保護者・地域から信頼される地域社会に根ざした学校
児童・生徒像	<p>夢と希望、笑顔あふれる生徒・苦しいことに屈せず、やり抜く抜く生徒</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自ら学ぶ生徒 学習に興味・関心をもち、新聞、読書、I C T機器を活用し、積極的・継続的に学ぶ生徒 ○ 豊かに鍛える生徒 自他の人権を尊重し、豊かな心と健やかな身体をもつために、自ら心身を鍛える生徒 ○ 共に歩む生徒 特別支援教育の一層の充実を図り、通常学級と特別支援学級の交流を深め、地域社会の一員としての自覚をもち、郷土を愛し、様々な文化や価値観を尊重できる生徒
教師像	<p>学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、生涯を通じて学び続け、生徒個々の力を最大限に引き出し、生徒の主体的な学びを支援する「伴走者」として邁進する教師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒・保護者から信頼される学習指導力、生徒指導力、進路指導力、組織貢献力を身に付け、生徒の健全育成に努める教職員 ○ 社会の変化や先行き不透明な現代社会に柔軟に対応し、生徒の学びの方向性を的確に指導できる教職員

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

1 学校の現状

(1) 生活

- ① 新型コロナウイルスの感染拡大により、昨年度に引き続き、多くの学校行事等が延期または中止に追い込まれた。2年連続の運動会や学習成果発表会（文化祭）等の中止により、集団生活の中から得られる協働の精神、規範意識の向上、異学年交流等を経験させることができず、ある意味、学校文化継承において、また、生徒の心身の成長において大きなマイナスとなった。
- ② 学年により問題行動が多発し、その対応に苦慮した時期もあったが、都の人権尊重教育推進校として、本校独自のポジティブな行動支援の取組である「なのしかP B S」（Positive Behavior Support＝積極的行動支援）が定着し、問題行動の指導回数が減ってきていることがデータでもわかった。また、その取組を家庭まで広げることができた。
- ③ 小中連携校との、話し合いの中では、この地域の小学生・中学生が「嫌いなこと・苦手なこと・興味がないこと」を避ける傾向が強いとの報告があった。授業態度や部活動の活動の様子を見ても、その一端が見て取れる場面が多くあった。
- ④ 1年間で「あいさつ」が定着しなかった。

(2) 学習

- ① 各学力調査の結果は、区平均・都平均等を下回る学年や教科が多く、ここ数年同じような結果が続いている。教員は「学力向上」に向け、授業改善を熱心に行っているが、結果が伴っていない。積み重ねの必要な数学や英語などの教科が低調なことを考えると、「家庭学習」の定着が最も必要なことと考えられる。また、各学力調査の結果の分析がその時だけで終わらないように、課題が克服されるように、年間を通して「指導の資料」にすべきである。
- ② 学習においても、生徒が「嫌いなこと・苦手なこと・興味がないこと」を避ける傾向が見て取れた。
- ③ G I G Aスクール構想により、本区でも一人1台のタブレット貸与が実現した。情報・知識の可視化・ワード、パワーポイント等のツール活用等において効果が見込まれる。今後、活用方法等を「情報モラル教育」と平行して、先進校等の取組を研修していく必要がある。

2 成果

「新しい生活様式」には生徒も慣れ、臨機応変な対応にも混乱なく、1年間を過ごすことができたことは大きな成果である。しかし、ここ2年間の制約ある教育活動は、生徒の活動や活躍範囲を狭め、成長に大きく影響したことに間違いはない。

都の人権尊重教育推進校として、最終年の取組となったが、新型コロナウイルス感染拡大により思うような研究はできなかった。しかし、その中でも、「やさしい木」の取組を家庭まで拡張し、保護者に協力を得たことは大きな成果であると言える。問題行動もデータの的には、減少傾向を示し、生徒との人間関係が構築できてきていることは明らかである。

本校独自の「学年担任制」については、生徒・保護者・教員ともにおおむね前向きにとらえている。3年目を迎え、年々課題が改善されてきている証である。さらに課題を改善し、目的に合った効果が実現できるように取り組んでいきたい。

3 課題

学習においては、教員の授業改善はもちろんではあるが、生徒の意識調査の結果や現状を学校としてしっかり把握し、各教科におけるキャリア教育等より、学習することの必要性を説き、生徒の意識改革につなげることが重要である。それが小中連携校の共通の課題であれば、なおさらである。本区が推進する「高校中退者0」を実現するためにも、「将来の夢をもたせ、それに向けて努力させること」を教職員が共通認識としてもち、自分が思い描く、「将来の仕事・生活・人間性」を実現できるよう指導していく。学力向上は本校の喫緊の課題であることを教職員全員が共通認識する。

昨年度の学校評価では、家庭での指導について踏み込んだ内容を盛り込んだ。保護者との連携をとる中で、「あいさつ・家庭学習の習慣化」等、協力を仰ぐところはこれまで以上に学校から発信していく。生徒の意識を改革できる＜起爆剤（方法）＞を学校として考えていくことが、現在、最も必要なことである。

4 重点的な取組事項						
	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R2	R3	R4	R5	R6
1	学力向上アクションプラン 授業力向上（ICT 機器活用含む）と家庭学習の定着に向けた取組	○	○	○	○	○
2	人権教育のさらなる推進	○	○	○		
3	あいさつの習慣化・礼儀、言葉遣いの指導の徹底			○	○	

5 令和4年度の重点目標

重点的な取組事項－1 学力向上アクションプラン 授業力向上（ICT機器活用含む）と家庭学習の定着に向けた取組									
A 今年度の成果目標		達成基準（目標達成率）		実施結果（達成率結果）		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
授業改善・朝学習・放課後補充および家庭学習の連動を推進する。また、授業においてはICT機器の活用を推進し、自ら学ぶ態度を育成し、確かな学力の定着を図る、		<ul style="list-style-type: none"> 令和4年度区学力調査 目標達成率 60% (R3: 54.6%) 年度末到達度確認調査 正答率 60% 家庭学習習慣化 生徒回答 70% 		<ul style="list-style-type: none"> 令和4年度区学力調査 目標達成率 52.4% 年度末到達度確認調査 正答率 45.5% 家庭学習習慣化 生徒回答 64.4% 		<ul style="list-style-type: none"> 学力調査については、2年数・英、3年国・英が達成率 50%を下回った。 生徒一人一人の誤答を Qubena シートで確認し、鹿浜菜の花タイムや春季休業中の課題として、取り組む。 家庭学習の習慣化ができていないため、基礎基本の反復学習が不足している。 		●	
B 目標実現に向けた取組									
新・継	アクションプラン	対象 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
新規	タブレットの活用	全教科	通年 教科による	教科担任 タブレットの使用頻度を上げる。(通年) ワード、パワーポイント等のツールの活用 (通年) AIドリルの活用	生徒アンケート	タブレット活用満足感 80%以上 ツール活用生徒自己満足感 80%以上	タブレット活用満足感 92.5% ツール活用生徒自己満足感 92.5%	AIドリル Qubena の活用をはじめ、生徒のタブレット活用が進んだ。	○
継続	単元テスト	全教科	単元 終了時	各教科で単元テストを実施し、スモールステップによる学力定着を図る	教科ごと、実施回数による。	教員評価 90%以上	教員評価 84.3%	教科ごとに実施し、基礎学力の定着に努めている。	○

継続	授業改善	全教科	通年	全教科で指導と評価の一体化のための授業改善に取り組み、信頼される指導と評価の実現を図る	授業観察 生徒、保護者アンケート	フィードバックによる指導・助言 生徒、保護者学校評価 90%以上	フィードバックによる指導・助言 生徒評価 91.7% 保護者学校評価 77.1%	教科指導専門員の助言等により、授業改善を図っている。	○
継続	鹿浜菜の花タイム	国語 数学 社会 理科 英語	通年	全教員 7月までにAIドリルを活用できる環境を整える。 漢字、計算、英単語コンテストを実施	学習コンテスト合格率	学習コンテスト合格率 80%以上	学習コンテスト合格率 漢字 73.3% 計算 65.5% 英単語 66.7%	定着度は3学年が一番高く教科、学年によりばらつきがある。	●
継続	小中連携	全教員 全教科	年8回	【連携小中】 管理職+教員 北鹿浜小・鹿浜五色桜小・鹿浜西小・鹿浜第一小 授業研究（小中1回ずつ） 小中共通課題への取組	教員学校評価	連携を必要 80%以上	連携を必要 84.3%	3年ぶりの焼酎連携授業研究は、円滑な接続のためにも有効であった。	○
継続	家庭学習の習慣化	全生徒	全教員	全教員 家庭学習の習慣化を図ることを目的とし、学習ノート、課題プリント、副教材、タブレットを活用させる。	生徒アンケート	家庭学習の習慣がついた 80%以上	家庭学習の習慣がついた 64.4%	家庭学習による基礎基本の定着と主体的学習態度の醸成が課題である。	●

重点的な取組事項－2		人権教育の継続的な推進			
A	今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
	一定の成果を収めたポジティブな行動支援を継続するとともに、キャリア教育の視点を取り入れた人権教育を継続・推進し、自尊感情、自己肯定感を育み、自分の良さや可能性に気付き、あらゆる他者を価値ある存在として尊重する心を育む。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒評価 90%以上 教員評価 90%以上 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒評価 88.3%以上 教員評価 85.5%以上 	なのしかPBSに基づいた人権尊重の指導が浸透してきている。	○

B 目標実現に向けた取組					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
ポジティブな行動支援を通して、自己指導能力を育む。	生徒評価 90%以上 教員評価 90%以上	・生徒指導等を通し、自ら課題を見だし、解決方法を考え、実行する力を身に付けさせる。 ・「やさしい木」等の取組を通して自尊感情、自己肯定感を育む。	生徒評価 88.3% 教員評価 85.5%	教員の指導のみならず、生徒も「なのしかPBS」の精神を理解し、前向きに考える風土ができつつある。	○
キャリア教育の視点も取り入れた人権教育の推進により、自尊感情、自己肯定感を向上させる。	生徒評価 90%以上 教員評価 90%以上	各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動等、あらゆる場面で、意図的にキャリア教育を推進し、自尊感情、自己肯定感を育成する。	生徒評価 88.3% 教員評価 84.3%	マナー講座や職場体験等をとおして、将来あるべき姿を描くよう指導にあたっている。	○

重点的な取組事項－3					
あいさつの習慣化・礼儀、言葉遣いの指導の徹底					
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
自分からあいさつができる生徒、TPOに合わせた、礼儀、言葉遣いができる生徒の育成		生徒アンケート	生徒肯定的回答 92.1%	基本的生活習慣の確立が課題となっているが、	△
B 目標実現に向けた取組					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
自分からあいさつができる生徒の育成	生徒評価 「あいさつを自分からできるようになった」 80%以上	定期的なあいさつ運動の実施、授業や部活動等、あらゆる教育活動の場面であいさつの指導徹底を図る。	生徒肯定的回答 92.1%	教職員も意識的にあいさつの声をかけている。	△
TPOをわきまえた、礼儀、言葉遣いができる生徒の育成。	生徒評価 「TPOをわきまえた、礼儀、言葉遣いができるようになった」 80%以上	授業や部活動等、あらゆる教育活動の場面で礼儀作法、言葉遣いの指導徹底を図る。	生徒肯定的回答 92.1%	大半の生徒は、礼儀正しくふるまうことができる。	△
小学校や家庭への「あいさつの習慣化」への協力	学校評価 生徒アンケート 家庭でのあいさつ習慣 80%以上	小中連携事業での協力依頼 開かれた学校づくり協議会への協力依頼 保護者会、通知等で年間を通して、家庭へ協力依頼	11/14～18、開かれた学校づくり協議会保護司会と協働したあいさつ運動実施 生徒肯定的回答 92.1%	地域の皆様の協力により、明るくあいさつが返ってくる。	△

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

新型コロナウイルスの感染予防による学校生活への行動制限が少しずつ緩和され、3年ぶりとなる行事が実施できるようになった。運動会、学習成果発表会は、感染予防以前の形態を変えながらも、生徒の創造性により新たな形で運営された。また、第3学年修学旅行、第1・第2学年魚沼自然教室、7組鋸南宿泊学習と宿泊行事も実施することができた。これらの行事により、集団生活の向上を図ることができ、授業規律や基本的な生活習慣においても落ち着いた行動がとれるようになってきた。

令和2・3年度、都の人権尊重教育推進校として、本校独自のポジティブな行動支援の取組である「なのしかP B S」(Positive Behavior Support = 積極的行動支援)が定着し、生徒の人権を尊重した教育を推進することができた。

学習面においては、各学力調査や定期考査の結果等を鑑み、生徒の課題克服と教員の授業改善を進めている。生徒1人1台のタブレットの配備により、AIドリル等を活用した個に応じた学習を取り入れることができた。

小中連携事業は、外部講師を招聘した教員研修会を1回、指導案検討と授業研究を2回ずつ実施し、「主体的・対話的で深い学びの授業づくりからの学力向上」について研修を深めた。また、部活動体験等の生徒と児童の交流活動により、小中9年間の円滑な接続を目指す。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

日頃より本校の教育活動にご理解ご支援ご協力を賜り感謝申し上げます。

鹿浜地区の貴重な財産である中学生の健全育成と学力向上のために、教職員の総力をあげて尽力してまいりますので、今後ともなお一層のご理解ご支援ご協力をお願いいたします。

(3) その他(学校教育活動全般について)

今年度は、各学年4学級ずつの12学級と特別支援学級で編成されました。

次年度も、「地域立中学校」として、生徒一人一人にきめ細やかな指導並びに支援ができるよう教育活動にあたってまいりますので、ご理解ご支援ご協力をお願いいたします。